

[10]

氏名	福留瑞美
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第233号
学位授与の日付	平成27年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	奉納百首の表現史
論文審査委員	主査教授 田中登 副査教授 山本登朗 副査教授 関屋俊彦

論文内容の要旨

本論文は、御子左家歌人（俊成・為家・阿仏尼）の奉納百首の表現をめぐる考察である。論文の構成は、以下のとおり。

序章 百首歌の流れ—平安中期から鎌倉後期まで

第一章 俊成五社百首

第一節 概説

第二節 『俊成五社百首』における漢籍の影響

第三節 『俊成五社百首』に詠み入れられた被注語・難儀語

第二章 為家七社百首

第一節 概説

第二節 『為家七社百首』における漢籍の影響

第三節 『為家七社百首』における俊成・定家の影響

第三章 阿仏尼五百首和歌

第一節 『阿仏尼五百首和歌』の成立の背景

第二節 『阿仏尼五百首和歌』の表現上の特徴—漢籍と先行歌の影響

第三節 新熊野社百首—阿仏尼の熊野信仰

第四章 比較から見る各社奉納百首の特徴

第一節 賀茂社奉納百首—俊成・為家・阿仏尼の表現の相違

第二節 日吉社奉納百首—俊成・為家・阿仏尼の表現の相違

第三節 天神社奉納百首—為家から阿仏尼へ

終章 奉納百首の性格

第一節 和歌が詠まれる「場」

第二節 俊成と定家の百首歌

序章では、平安中期の初期百首から堀河百首を経て、鎌倉期までの百首歌を概観し、その上で、俊成の創始した堀河百首題による独詠型奉納百首の位置づけを試みた。

第一章の「俊成五社百首」は、第一節の概説に次ぎ、第二節では、俊成五社百首に見る漢籍の影響を指摘した上で、とりわけ春日社百首については、自註形式・配列・構成などにおいても、漢籍の影響が見られることを論じた。第三節では、歌論・歌学書や歌合の判詞における被注語・難儀語などを詠み込んだ作が、作品の重要な構成要素となっていることを例証。また、『家隆後度百首』や『六条院宣旨集』など、俊成生前の作品にも、当該作品からの影響が見られることを根拠に、奉納という宗教的な意味合いから、詠歌の手本へと、俊成自ら当該作品の役割を変化させたと結論づけた。

第二章の「為家七社百首」は、第一節の概説に次ぎ、第二節では、『和漢朗詠集』や白詩などの影響が大きく、このことが当該作品の重要な構成要素となっていることを明らかにするとともに、第三節では、先行の『俊成五社百首』のみならず、『長秋詠藻』（俊成）や『拾遺愚草』（定家）などの和歌を、為家が意図的に摂取していることを、具体例を挙げつつ指摘した。

第三章の「阿仏尼五百首」は、第一節の作品の成立の背景に次ぎ、第二節では、漢籍と先行歌（とりわけ為家詠）の影響を確認し、訴訟のための鎌倉下向の旅や為家讓状などを意識した表現があることを指摘。第三節では、新熊野百首が、紀路の熊野詣を想定した歌枕を数多く詠み込んでいることや、また内容面において、悲嘆・望郷・孤独感・焦燥感・閉塞感など、和歌を通して救済・功德を求めようとする、いわば現世利益に重きを置いた性格であることを明らかにした。

第四章の「比較から見る各社奉納百首の特徴」は、俊成・為家・阿仏尼の三者に共通する賀茂社奉納百首（第一節）と日吉社奉納百首（第二節）の、表現上の相違を考察。その結果、俊成詠は、神意に配慮しつつ、神社周辺や無関係な地名を詠んだ「普遍的情景描写型」であり、為家詠は、神社の様子やその周辺地域の情景を詠んだ「神祇的情景描写型」、阿仏尼詠は、強い旅人意識から、四季の移り変わりに託して自身の信条を詠んだ「述懐重視型」であることを提唱した。なお、第三節では、為家と阿仏尼だけに共通する天神社奉納百首を取り上げて比較。結果、為家詠には道真詠からの摂取が多いことを指摘、阿仏尼詠には、その為家詠からの影響が見られることを論証した。

終章の「奉納百首の性格」は、百首歌が詠まれた場に注目し、それらを「要請の有無」「宗教性の有無」「規模の大小」の三つの視点から、八つのパターンに分類。結果、定家詠の奉納百首が、『俊成五百首』のような独泳型奉納百首ではなく、奉加・追従型奉納百首であることを明らかにし、こうした奉納百首としての性格の違いが、為家をして、父定家ではなく、祖父俊成の五社百首になぞらえさせることになったのだと結論づける。

論文審査結果の要旨

本論文の第一章「俊成五社百首」の第二節では、当該百首の和歌表現に、漢籍からの影響があることを、丹念な調査から具体的に指摘し、第三節では、歌論・歌学書や歌合の判詞などにおいて叙述されている被注語・難儀語を詠み込んだ作が、作品の重要な構成要素となっていることを併せて指摘。もって、当該作品が俊成歌学の集大成的な性格を有していることを論証した意義は、高く評価されてしかるべきであろう。

第二章「為家七社百首」では、当該作品に『和漢朗詠集』や白詩など、漢籍の影響がき

わめて大きいことを指摘すると同時に、祖父の俊成、父の定家の家集などからも、為家がその表現を積極的に学んでいることを論証しているが、丹念な表現調査の上に立った、この論は十分に支持しえよう。

第三章「阿仏尼五百首」は、第二節では、実例は少ないものの、間接的ながら漢籍の影響を指摘した上で、先行（俊成・定家・為家）の和歌の影響としては、圧倒的に為家のそれが大きいことを論証。また鎌倉の新熊野社に奉納した百首でありながら、歌枕としては、紀路の熊野詣を想定して詠まれていることや、内容面では、悲嘆・望郷・孤独感・焦燥感・閉塞感などが窺え、そこには、現世利益に重きを置いた、阿仏尼の信仰心が見られることを提唱したものだが、当該作品の性格を追求して、核心をついた論考となっている。

第四章「比較から見る各社奉納百首の特徴」は、第一節・二節を使って、俊成・為家・阿仏尼の三者に共通する、賀茂社および日吉社の奉納百首の表現上の特色を探り、その結果、俊成の「普遍的情景描写型」、為家の「神祇的情景描写型」、阿仏尼の「述懐重視型」という結論を導き出しているが、この結論は、詳細に個々の和歌的表現を検討した上でのことであって、首肯しえよう。第三節の天神社奉納百首についても、同断。

終章「奉納百首の性格」は、平安から鎌倉にかけての百首歌を、三つの視点から八つのパターンに分類し、本論文で扱ってきた百首歌を、そのパターンの中に位置づけ、結果、為家詠が定家詠にではなく、俊成詠の影響を大きく受けることになった由来を解き明かした当該論文は、広い視野に立った百首歌に対する考察で、貴重な結論となっている。

以上、本論文は、平安から鎌倉にかけて、御子左家の藤原俊成とその孫の為家、さらには為家の妻阿仏尼の、三者による奉納百首の表現上の特色と、その影響関係を、広範囲な調査を基に明らかにしたもので、学問的に十分評価に値するものと思われる。

よって、本論文は博士論文として、価値あるものと認める。